大官大寺下層土坑出土の貯蔵器と煮炊具

大官大寺SK121出土土器については、すでに食器と須恵器貯蔵器の一部を報告した（『紀要2001』）。ここでは、土師器煮炊具と須恵器貯蔵器を紹介する。

図46-1～11は土師器甕。1～3は口縁部が内湾しながら開き、下脹れの球形の胴部を持つ河内型の甕。1・3は胴部上半を縦方向、下半は横方向の細かなハケ目で調整する。2の胴部内面には削りを施す。4・6・7は口縁部が外反するもので、胴部は球形になると思われる。4は風化のため、調整は不明。5の底部は小さな平底で、製作時の線状の圧痕がある。胴部外面は縦ハケ、口縁部内面は横ハケで調整する。7は大型品。8～11は長胴の甕。8は胴部内面に板状工具によるナデ調整を施す。9は胴部内面上半に横ハケ、下半には縦ハケを施す。10は胴部外面を縦ハケ、内面の上半は横ハケで調整し、下半は下から上に時計回りに削り上げる。口縁端部はわずかに内湾する。11は胴部外面全体を粗い縦ハケで調整した後、下半に細かい縦ハケを加える。内面は下から上へ削り調整を施す。10・11は伊勢地方からの搬入品で、9も伊勢型の甕であろう。12は土師器甑で、同一個体の口縁部、把手部、底部の破片から図上復原した。外面は縦ハケで調整し、口縁部にヨコナデを加え、底部付近はハケ目をナデで消す。口縁部内面には横ハケを施す。

図45-13・14は須恵器短頸壺。13は肩部に4条の浅い凹線を施し、胴部下半は手持ち削りで調整する。14は肩部に3条の浅い凹線を施し、その間に二段の櫛描波状文を入れる。波状文の単位は、上段が6条、下段が4条。胴部外面下半はロクロ削りを行うが、方向が一部乱れる。15は須恵器四耳壺。口縁部外面の上下に2条の沈線を施し、肩部に4個の耳を付す。胴部外面には格子目叩きが残り、胴部内面は当具痕を軽くナデ消している。16は須恵器甕の口縁部。外反しながら開き、端部は折り返して肥厚させる。外面に4条単位の櫛描凹線文を縦に施した後、2条単位の横方向沈線を2カ所に入れる。17は須恵器甕。同一個体の4片から図上復原した。強く外反する短い口縁部を持ち、縦長な球形の胴部で、底部は丸底になると思われる。胴部外面に平行叩きを持ち、肩部の3カ所にカキ目を施す。内面には同心円状の当具痕が残る。

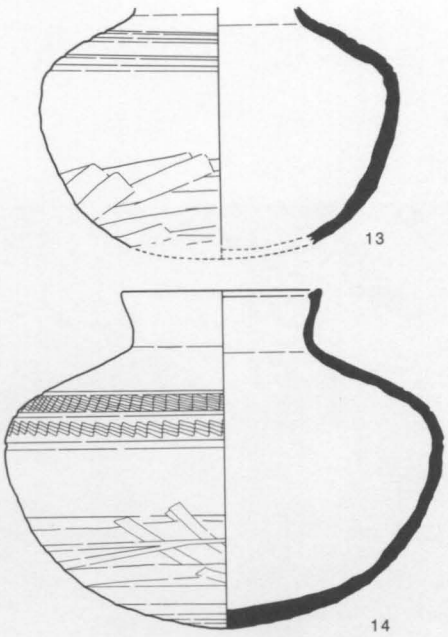

図45　SK121出土須恵器　1：4

表7　SK121出土土器の構成

土師器 器種	個体数	比率(%)	用途別・比率(%)
杯A	11	6.5	
杯B	10	5.9	
杯B蓋	*5	—	
杯C	45	26.6	
杯E	1	0.6	
杯G	4	2.4	
杯H	13	7.7	
皿A	25	14.8	
皿B	1	0.6	
皿B蓋	*1	—	
皿H	8	4.7	
鉢A	8	4.7	食器 142
高杯	16	9.5	84.0%
壺A	2	1.2	貯蔵器 2
甕A・B	13	7.7	1.2%
長胴甕	8	4.7	煮炊具25
甑	4	2.4	14.8%
計	169	100%	100%

ロクロ土師器 種	個体数	比率(%)	用途別・比率(%)
杯B	2	13.3	
杯B蓋	*5	—	
杯C	8	53.4	
杯G	3	20	
杯G蓋	*7	—	
皿A	2	13.3	食器 15
計	15	100%	100%

須恵器 器種	個体数	比率(%)	用途別・比率(%)
杯A	6	9.5	
杯B	8	12.7	
杯B蓋	*9	—	
杯G	19	30.1	
杯G蓋	*14	—	
皿A	3	4.8	
皿B	2	3.2	
盤	2	3.2	食器 40
蓋	*3	—	63.5%
壺C	2	3.2	
壺K	5	7.9	
短頸壺	3	4.8	
短頸壺蓋	*3	—	
四耳壺	1	1.6	
平瓶	3	4.8	貯蔵器23
甕	9	14.2	36.5%
計	63	100%	100%

固体数の集計で、蓋（*）は除外した。他に緑釉陶器1点と土鈴2点、および弥生土器が出土している。

土師器：ロクロ製土師器：須恵器＝68.4%：6.1%：25.5%

SK121出土土器の構成　SK121出土の土師器、ロクロ製土師器、須恵器の個体数を表7に示した。土師器がおよそ7割を占め、須恵器が2割5分、残りがロクロ製土師器となる。食器の割合は、土師器は8割以上、須恵器では6割以上となり、ロクロ製土師器は全てが食器である。食器内では土師器、ロクロ製土師器の杯Cと須恵器杯Gが高い比率を示す。

この数値の意義については、比較すべき資料がまだ不足している観があるが、飛鳥Ⅲ土器のある程度の傾向は示すであろう。しかし、飛鳥・藤原地域の土器は、遺跡、あるいは遺構ごとに構成が異なることが指摘されている。今後は、7世紀の土器の様相をより一層明確にすべく、こうした資料の蓄積にも努めていきたい。

（玉田芳英／文化庁記念物課）

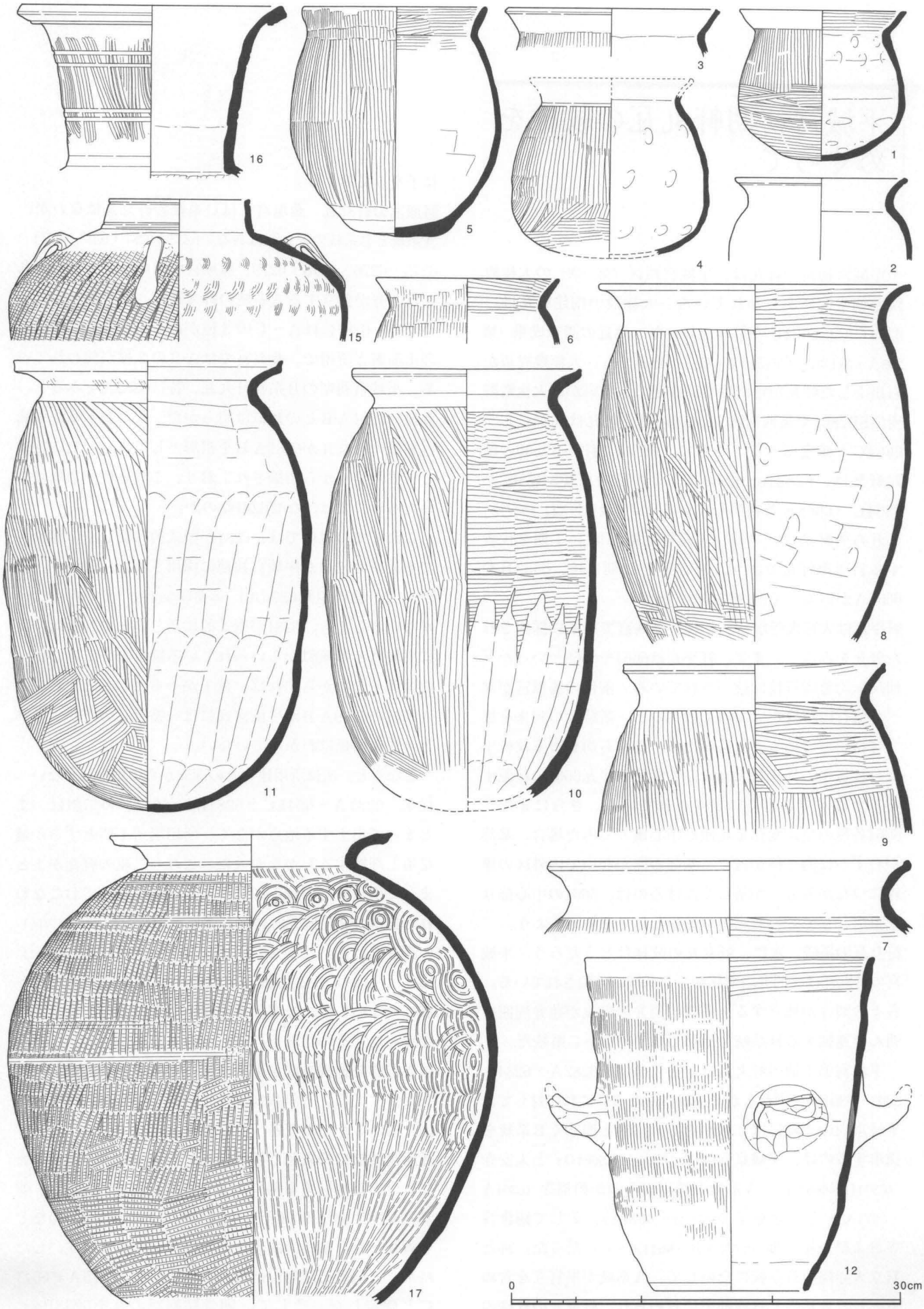

図46　SK121出土土器　1：4